

2023年度

東洋大学 IRニュースレター

Vol.4 (通算第13号)

学生の生活・授業経験・身に付いた能力・満足度 —2023年度在学生アンケートの結果分析—



東洋大学
学長・IR室長 矢口悦子

今年度の在学生アンケートの概要についてご報告いたします。昨年度の結果においてもコロナ禍からの脱却による学生たちの活動の多様化や不安の解消が読み取れましたが、今回の調査結果は、その傾向がより顕著に表れています。生活時間を見ると、さまざまな活動時間が増え、その中でも「自主的な学習」に使う時間の増加は注目に値します。また、コロナ禍の経験を踏まえながらも対面中心の授業運営を行うことにより、学生の興味や理解を促す授業や、双方向型の授業など、多彩な工夫が施された授業形態の経験も広がっています。このように充実した大学生活を送る学生が増加傾向にあることから、学習や大学生活で身に付いた能力に対する自己評価も若干高まり、大学や学部・学科への満足度の向上につながっているように思います。

教職員の尽力によりアフターコロナの授業運営などに対し、学生たちは好意的な回答傾向を示しております。さらなる向上を目指し、引き続き多様なニーズを持った学生一人ひとりの成長を応援してまいります。

調査の概要

実施期間: 2023年11月24日(金)～12月22日(金)

回答状況: 在学生(全学部1～4年生) 29,156名中6,784名(回答率23.3%)

学年の分布: 1年生37.6%、2年生23.1%、3年生15.4%、4年生23.8%

実施方法: Webアンケート(Googleフォーム)

分析担当: IR室 教授 劉文君

分析の目的: コロナ禍の収束に伴い、学生の生活、授業外活動はどのように変化してきたか、さらに経験した授業形態・成長・満足度などについて、過年度と比較しつつ、その実態を明らかにし、今後学生の生活、学修をより効果的にサポートするためのエビデンスを探る。

1. 生活時間の变化

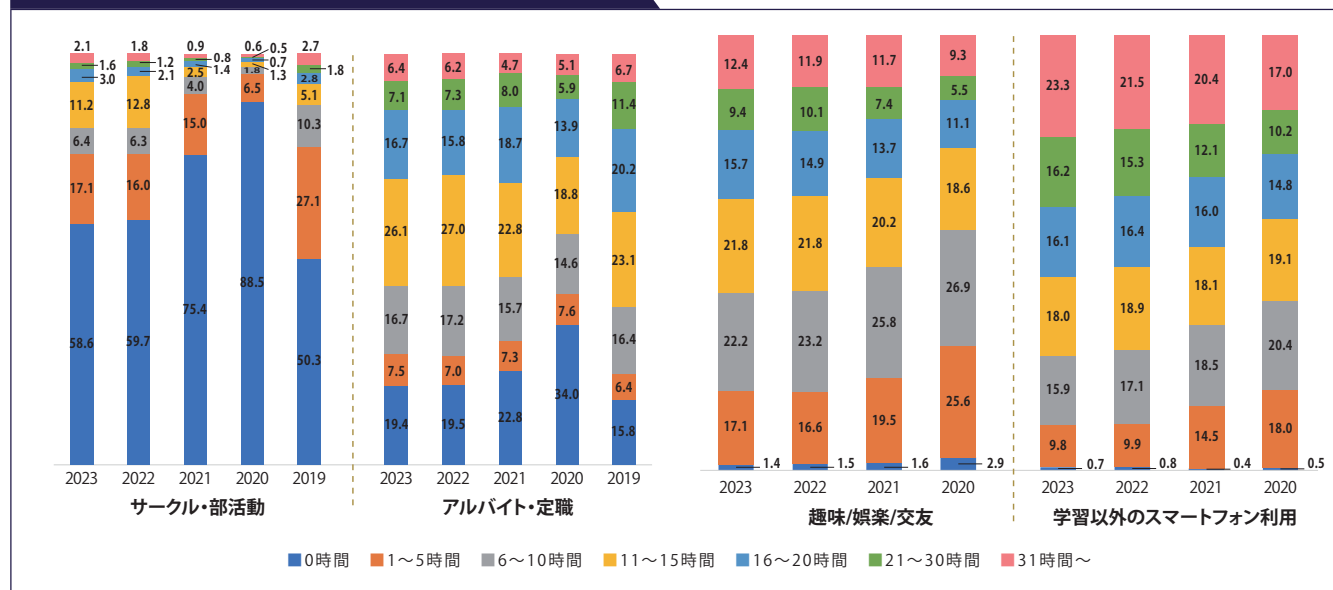
設問「春学期の平均的な1週間(7日間)の生活時間について、当てはまる時間数を選択してください。」について、まず学生の学修外の生活・活動に関する回答の変化を見てみる(図1)。

① 学修外の生活・活動時間の变化

「サークル・部活動」「アルバイト・定職の時間」について、<0時間>の割合が昨年とほぼ同じ、2019年度までに戻っていないものの、2020年度から2023年度の間に、逡減する傾向である。

また「趣味/娯楽/交友」「学習以外のスマートフォンの利用」時間も、<15時間以下>が減少している(2019年度調査なし)。全体として学生の学修外のさまざまな活動の時間は増える傾向が見られる。

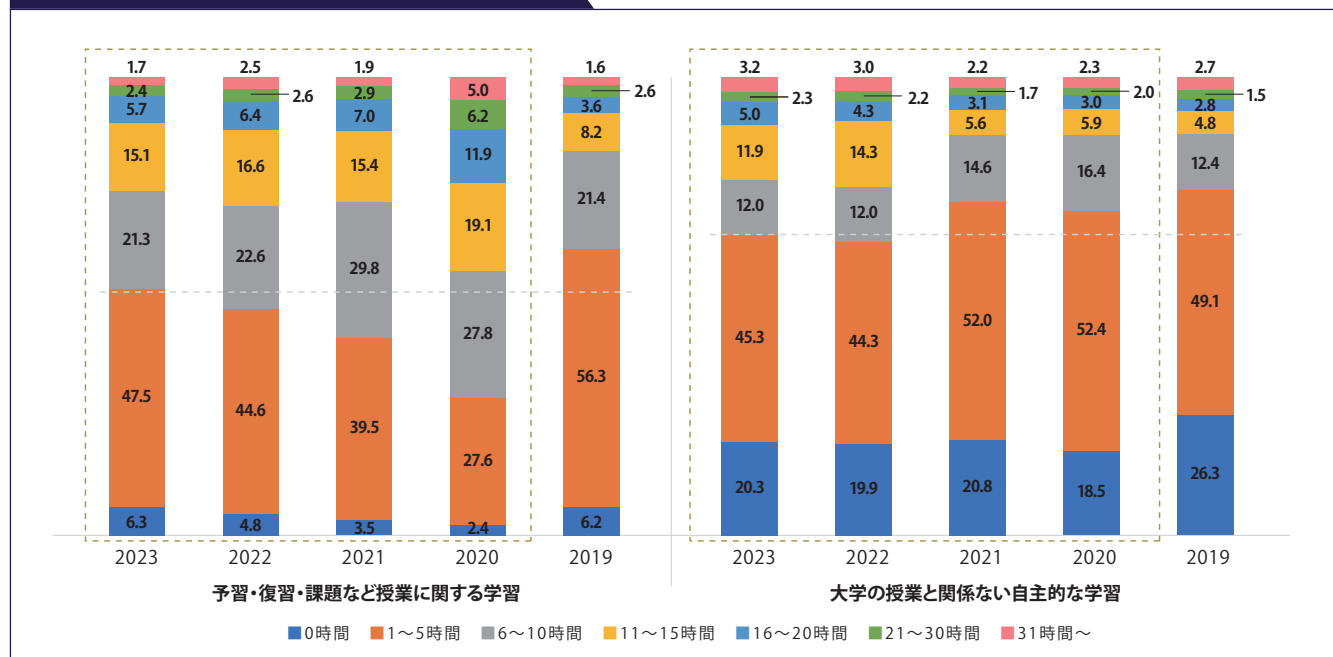
図1 学修外の生活・活動時間(2019~2023年度)(%)



② 学修時間の变化

他方、学修時間の变化を示す図2を見ると、「授業に関する学習」は、<0時間><5~1時間>の割合が、2020年度ではオンライン授業で「課題」が多いため急速に減っていたが、2021年度から増加する傾向が見られる。「自主的な学習」は、<0時間><5~1時間>の割合が、昨年度とほぼ同じ、2019~2021年度より低い。また、「授業に関する学習」「自主的な学習」の学修時間(1~3年次)について、学部別の差が見られる(データを略)。

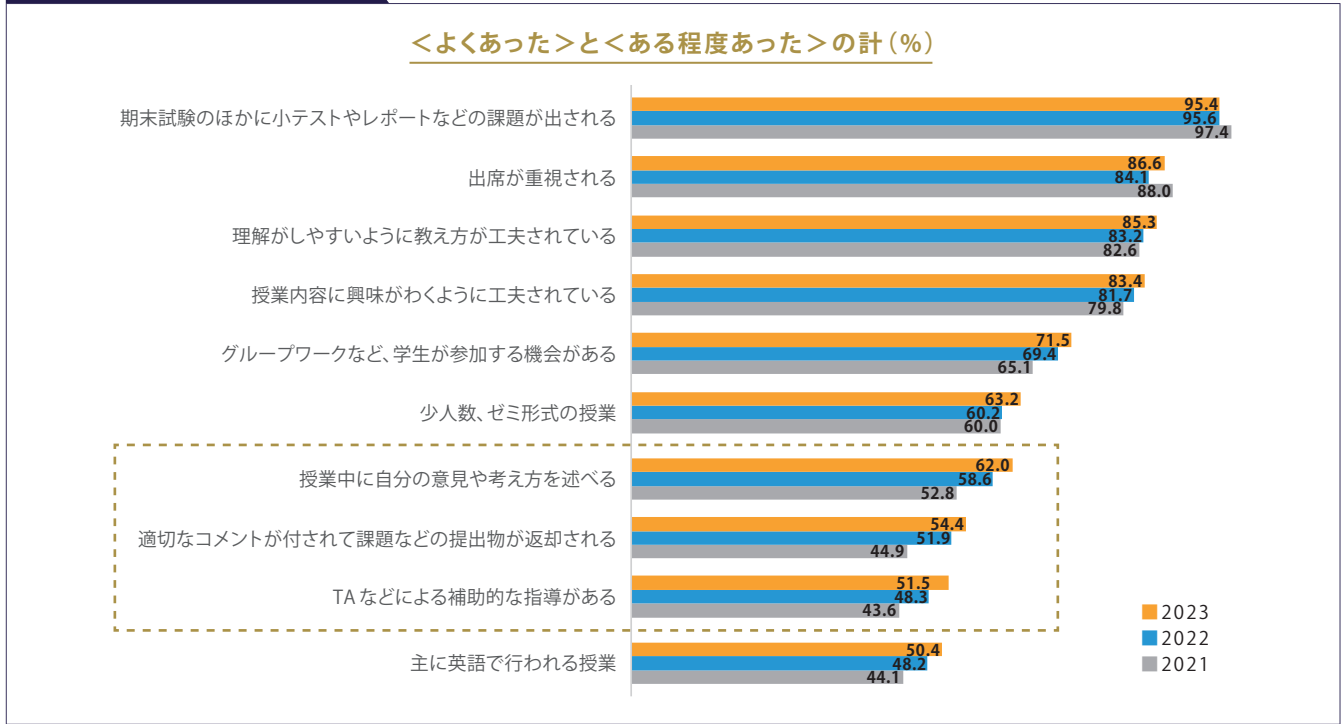
図2 学修時間の变化(2019~2023年度)(%)



2. 経験した授業形態

図3は設問「これまで受けた授業で、次のようなことがどれくらいありましたか?」に対して、各項目に「よくあった」と「ある程度あった」と回答した合計である。図から分かるように、「理解がしやすいように教え方が工夫されている」「授業内容に興味をわくように工夫されている」は増加傾向である。「グループワークなど、学生が参加する機会がある」など学生の参加をうながす「双方向型」の授業形態は、まだ比較的に割合が低い、増加の傾向である。とくに、その中でも「授業中に自分の意見や考え方を述べる」「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」「TAなどによる補助的な指導がある」の3年間の増幅が比較的大きい。

図3 経験した授業形態 (%)



3. 身に付いた知識・能力

図4 身に付いた知識・能力 (2022~2023年度) (%)

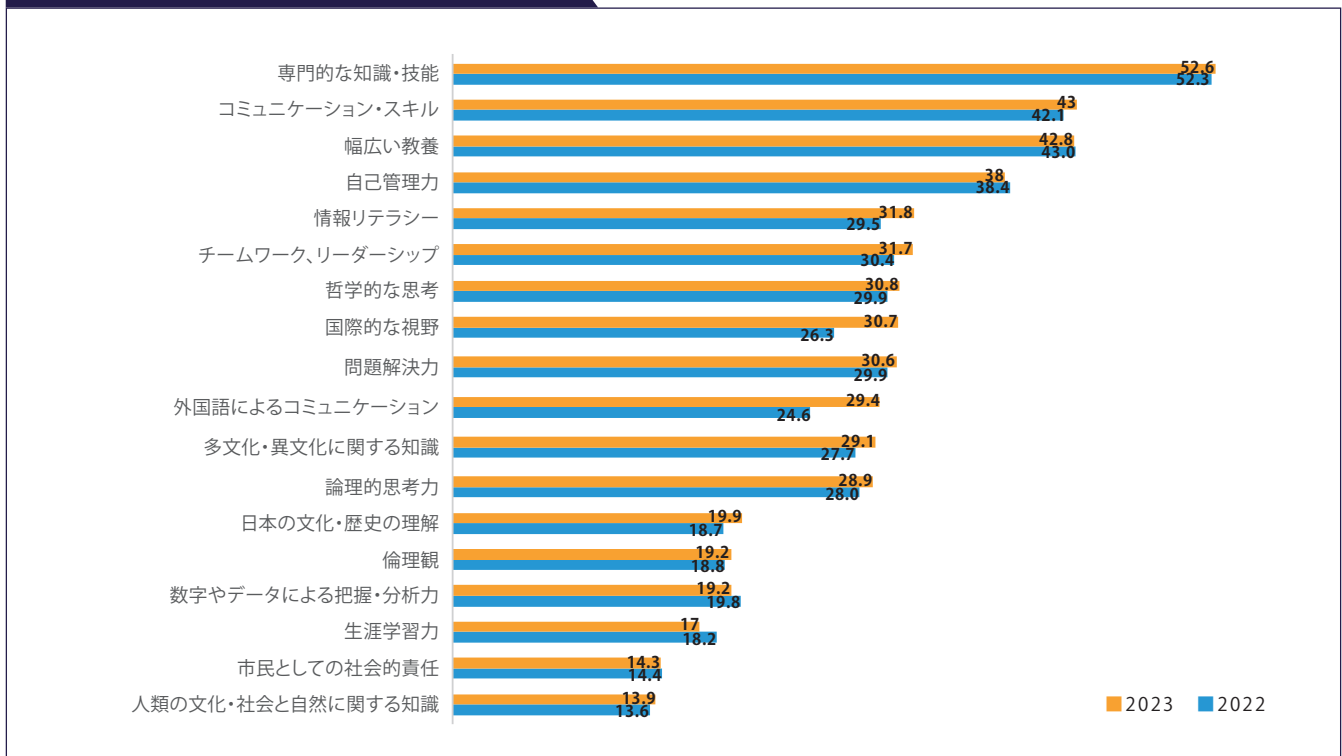
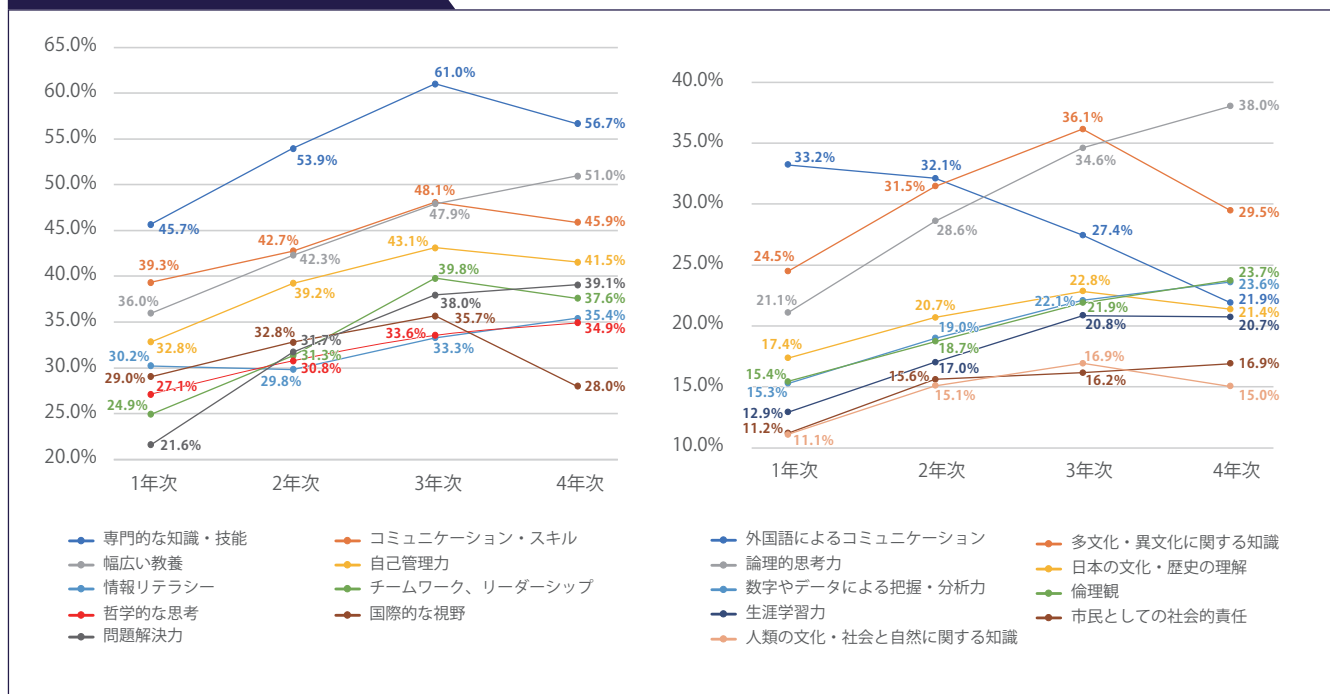


図4は設問「これまでの学習・大学生活を通じて、身に付いたこと」について、2022～2023年度の肯定的な回答の割合を示している。昨年度と同じく、「専門的な知識・技能」「コミュニケーション・スキル」「幅広い教養」「自己管理能力」での割合が比較的高い。多数の項目では、大きな変化がないが、「国際的な視野」「外国語によるコミュニケーション」などは昨年より増加している。

さらに、学年別の身に付いた知識・能力の肯定的な変化を見てみると(図5)、多数の項目では、3年次までは学年が上がるにつれて割合が高く、一部の項目で4年次で3年次より低くなっている。また、「国語によるコミュニケーション」では、学年が低いほうが、割合が高い。

全体として、学年が上がるにつれて、身に付いた知識・能力の自己評価が高くなっている傾向が見られる。

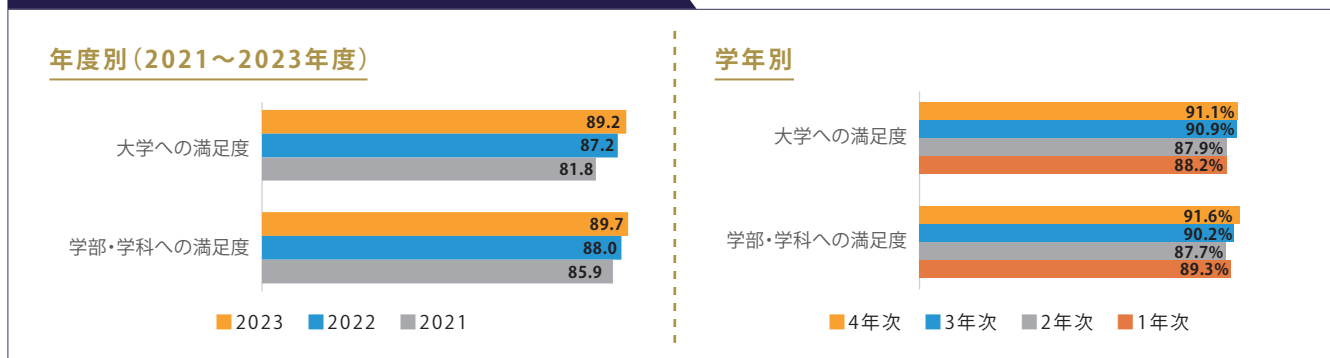
図5 身に付いた知識・能力(学年別)



4. 大学、学部・学科への満足度

大学、学部・学科への満足度[<満足している>と<やや満足している>の計(%)は年度別で近年ほど高く、また、学年別では高学年の満足度がやや高い傾向にある。

図6 大学、学部・学科への満足度(年度別・学年別)(%)



まとめ

コロナ禍の収束、対面授業の再開につれて、「サークル・部活動」「アルバイト・定職の時間」などの時間が増え、学修外の生活は元に戻りつつある。他方、学修時間、とりわけ「予習・復習・課題など授業に関する学習」時間の「過少」(5時間以下)の割合は、コロナ禍前の2019年度まで及ばないが、2020年度から増加の傾向である。また、学修時間に関して、学部間の差が見られる(注)。

学生の受けた授業は、学生の理解・興味をもたらす工夫のある授業が微増である。また学生の参加をうながす「双方向型」の授業の割合が増え、「授業中に自分の意見や考え方を述べる」「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」「TAなどによる補助的な指導がある」の増幅が比較的大きい。

「身に付いた知識・能力」(自己評価)は多数の項目での肯定的な回答は昨年度より増加している。また、高い学年ほど、「身に付いた知識・能力」の自己評価が高くなっている傾向も見られる。

大学、学部・学科への満足度は高くなっている。また、3年次・4年次の高学年のほうが1年次・2年次より満足度がやや高い。

(注) IR室運営委員会報告資料「2023年度在学生アンケートの結果分析」(2024年3月6日)はガールーン/ファイル管理/IR室関連で学内へ公表しています。適宜ご参照ください。